双子

翔子の部屋

第二章～翔子の部屋～

翔子が亡くなった事はニュースにまで取り上げられた。「怪奇事件」と言われたこの事件は全国へと広がっていった。
私は事件のショックという事もあり会社をしばらく休む事にした。編集長もその方が良いと行ってくれたので、その言葉は
今の私にとって本当に有り難い言葉かも知れない。何故、翔子があんな死に方をしたのか・・・
＜美佳子助けて＞
そのメールが凄く私の胸に刺さる。翔子は何故、私にメールしてきたのかと考えてしまう。。
翔子からは前から相談は乗っていた。その度に私は翔子の事を心配していたが、まさかこんな事になるなんて
夢にも思わなかった。
そんな事を考えていると翔子のお母さんから電話がかかってきた。
どうやら、翔子の部屋に私宛に手紙があるという。私はすぐ家を飛び出した。
翔子の家に行くとお母さんが出迎えてくれた。
「ここに座ってて、手紙持ってくるから」
リビングに案内され待っているとお母さんが手紙を持ってきてくれた。
「読んでてね、お茶入れてくるから」
手紙を開けると震えた手で書いたと思われる字でこう書かれていた。

美佳子へ

この手紙を書いている傍でも’あの子達’はずっと私の傍にいて私を見ている。精神がおかしくなって幻覚でも見ているのかと一時はそう思ったんだけどそうじゃない。’この子たちは存在する’。あなたがこの手紙を読んでいる時は、もしかしたら私はもう死んでいるかも知れない。美佳子、もしあなたが私と同じような事になったら、これだけは絶対にしちゃダメ。’あの子達を拒否する事は絶対にダメ’。

これで文章は終わっている。’あの子達’・・文章に何回も出てくる「あの子たち」とは誰の事だろうか・・
また、最後の’あの子達を拒否する事は絶対にダメ’という部分が妙に力を入れて書いているように思えた。
「手紙なんて書いてあったの？」
「いえ、特に伝える事は書いてなかったです」

「そうなのね、はいお茶」
そう出してくれたおばちゃんの手は痩せてしまっていた。翔子が亡くなってからご飯とか食べているのだろうか・・・
なにより悲しいのはお母さんだろうから・・・・。
翔子のお母さんは翔子が亡くなってから自分を責めていた。翔子が死んだのは自分の責任だ。そう言い続けていたのだ。あんな死に方をした翔子の事実を認めたくなかったのだろう。
「翔子の部屋はどうなっているんですか？」
「あの事件のままよ・・・」
翔子のお母さんは凄く震えた様子だった
「見ても？」
「はい・・」
翔子の部屋へと続く階段を登ると嫌な感じがしてきた。何だろうこの感じ。何だか空気が重くなっていくのが解る。
なんとも言えない威圧感。
翔子の部屋の前までくるとそれが、更に強くなった。
部屋の前から異臭がしてくる。その異臭がなんの匂いかすぐ解った。
部屋を開けるとその異臭が更に強くなる。生臭い鉄の匂い。そう'血'の匂いだ。
部屋は綺麗になっていると言っても少しまだ血が残っている。「何だろう・・・」と部屋を見ていると
何だか違和感を感じる、誰かに見られているみたいな感じ。
そんな違和感を感じながら部屋を見渡すと壁には爪の後があり、ベットには歯型みたいなのがある。
「どうして、こんな事に・・・・」
その傷が生々しく、恐怖心へと変わっていった。
部屋を出ようとしたその時

＜今度はお姉ちゃんが遊んでくれるの？＞

「誰！」
振り向いても誰もいない。今の声は。。。耳元で囁かれたかのような声だった。
「どう？何かあった？」
「いえ、翔子があんな事になってしまって。。。私も相談に乗ってたのですが凄く残念です。」
「良いのよ、いつも翔子はあなたの事話してたわ」
「私の事？」
「そうよ、いつもあなたの事話してくれるの。昔の事を楽しく話している翔子は笑顔だったわ」

嬉しそうに話してくれるおばちゃんに私は泣きそうになった。
「では、お邪魔しました」
「いいのよ、またいつでもおいでね」
「ありがとうございます」
そう言って翔子の家を後にした。しかし、あの声は何だったんだろうか？
疑問が残るまま帰った。あの声はこの後起こるすべて序章だった。